よくわからないごちゃごちゃしたもの

モブにもなれない人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よくわからないごちゃごちゃしたもの

【Nコード】

N5414Z

【作者名】

モブにもなれない人

【あらすじ】

いわゆる夢日記つてやつ。書きたくなる程の夢は初めて。

現実時間の20:00 23:50の間に寝ていて、その中の一瞬で見ていた夢。 補完などはほとんどせずにそのまま書いたため、訳がわからないと思います。すみません

夢を見た。不思議な夢だった。

と言っても所詮は夢。起きて数刻経てば内容の大部分は忘れてる。けれど俺はこの夢を覚えていたくて、だから何かに書き写そうと思った。頭おかしーんじゃねえかとも思うだろうがすまない、本当なのだ。

覚えているシーンは三つ。その一つ目は零戦で空を駆る俺だった。二人乗りの零戦だからきつと練習機カラバウルにあった改造機なのだろうと思う。急降下で全力出すと分解するよ、なんて笑顔で言われたのだから多分間違いない。

理由は何か忘れたが、その時俺は少女を伴ってそこへ行く必要があった。だのに足は複座零戦。徒歩や車に比べたら大分マシなのだろうけど、何故かはわからないが急降下したら分解すると聞いただけで酷く憤慨したの俺は。

しかしそれ以外に手段がないのは事実。

「俺が連れてってやるよ」

なーんて隣の少女に宣っちゃう辺り何かに舞い上がっていたんだろうか。しかし話はそんなに甘くなくて。

端的に述べれば俺達を複座零戦の元に案内したソイツは悪魔だった。分解しなければいいのだろう？ と口角を釣り上げたソイツはとにかく離陸させようとした。酷く不安を覚えたものの、もたついてる暇などない。大地を蹴って羽ばたいた零戦を待っていたのは空を飛ぶソイツだった。

巨大な竜巻が、目の前にあった。それらの周りを伸びる風のトンネル。さあいくぞ、と笑うソイツは俺達の乗る零戦を無理矢理そこへ誘導し……そのトンネルへ入れた。

もうね、ジェットコースターなんて兎戯に等しい程酷かった。螺旋を描いたりループを繰り返したり。直角に急降下したりとかもあったが、何故か機体はバラバラにならなかった。胃がシエイクされ、気がついた時には目的地に辿り着いていた。先の自身の台詞が痛々しい。絶叫しか放ってなかった。

帰りも同じだった。うおおあああ、と情けない声を上げながら、流れに身を任せていた。

二つ目は事件だった。これについて語る事は少ない。ただ、グループのリーダーと思われる女性に誰かが耳打ちし、それを聞いた女性が俺達に命じたのだ。

「乗ってきた船を探せ」

暗殺事件だった気がする。とにかく、俺達は命令一下、港にある船を洗うドッグみたいなとこに散り散りに向かうこととなる。

俺は海側から進入だった。水面から壁をよじ登り、隙間から中を伺った。ぶつちゃけこの話ではここが一番鮮明だ。

堅牢な床にどうやって運んだのか置かれている船。そして何十メートルもあるかわからない程高い天井から、水が流れて船の姿の大半を覆い隠す。建物の奥行きもかなりあって、人などまさにゴミのような大きさだった。この場面はここで途切れる。

最後の三つ目。これが一番書きたいことだ。布団が入れられた巨大な押入の上段に俺と、二人程の仲間、そして守るべき少女のラク스가いた。

先に断っておくが歌姫であれに出てくるラクスではない。いや確かに現実にてGジェネ見てラクス凜々しいわーとか本編を見てもいないの思っていたが。

とにかく、計四人でそこへそこに隠れていた。追っ手から逃げおこせるために。

隠れて逃げれると思ったのだろう。しかし現実どころか夢の中までも甘くはない。

追っ手の一人が休憩を始めた。よりもよって巨大押入の上段と下段を分ける仕切の下で。押入は下段だけで高さは二メートルぐら이었다(尤も後で変わるのだが)。チヨコの封を開け、よりもよって上段に置いた追っ手は疲れを癒していた。俺らは布団の影に隠れたため、なんとか見つからずに済んでいたのだが……仲間が駄目だった。どうせ見ていないのだからとそのチヨコをパクろうとしたのだ。

「おい絶対バレるだろやめろよ！」

「いいじゃんいいじゃん、バレやしないさ」

必死に止めた。ラクス、友達の運命が掛かっているのだ。懸念事項は一つでも取り除くべきだった。しかしそいつは俺の制止も聞かずにチヨコに手を延ばし、見つかった。芋蔓式に俺達も見つかり、増援を呼ばれ袋のネズミ。どうしようもなかった。

やがてへりまで飛んで、何故かここまで来ずに一定の位置でホバリングしたままだ。へりが出る程ここは高くなかったはず、と思つて下を向けば人人人。何故か高くなっている押入の下には追っ手が蛆のように溢れていた。四人VS無数の追っ手。勝ち目は無い。

「抵抗は止めなさい。身柄さえ渡してくれば君達の命は保証する」

定型文のような投降勧告だった。そして当然俺らはそれを蹴る。

「ふざけるな。友達なんだ」

涙が溢れてくる。何故かはわからない。けれどどうしても悲しくて、ボロボロと滴を落としながら叫んだ。

「どんなことがあるうとラクスは渡さない！ 友達を、ラクスを売るなんてする訳ないだろう！」

俺ら三人の総意だった。死んでも守る。そんな悲壮な決意。ラクスはどう思っていたかはわからない。けれど泣いていた。夢にしてはシリアス。追っ手は俺達の言葉を聞き、侵攻を開始する。ラクスを捕らえるために。

本を積み上げ、階段代わりに上ってくる追っ手は今思えば滑稽だった。その本に人が乗りまくってたから、押入が大きくなったのではなく人が小さくなったのだと理解した。とにかく、現実では滑稽だったが夢の中では必死だった。来る敵来る敵全てを蹴落とすのに、ラクスを守るのに必死だったから。某ゲームのザックスはこんな思いだったのだろうかと思う。倒せど倒せど沸いてくる無限の敵。尤も、彼に比べれば俺は仲間が二人いて大好きな友人がすぐ後ろにいるだけで遙かにマシなのだろうか。

そして――

(後書き)

はい終わり。偉く中途半端ですが終わりです。

最後にどうなったか、俺にもわかりません。間違えた覚えてません。だって夢ですしおすし。

電波な話をすれば夢と言うのは大量にある前世の記憶、だと俺は思っていたりします。いや、摩訶不思議な夢全体がではなくその一部が。

例えば今回の夢だと零戦に乗る飛行士、大きなグループの下っ端、ラクスを守る友達。魂に刻まれた多数ある前世の記憶が夢として現れた、みたいなの？ いいじゃないですか、ロマンがあつて。

そして、三つ目のお話ですがやけに鮮明です。フィルムの絵みたく断片的ですが現実並に。

こう言う印象に残る夢はまた見たいなあ……ホラー系以外で、ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5414z/>

よくわからないごちゃごちゃしたもの

2011年12月18日06時45分発行